山梨医大紀要　第1巻, 51－57(1984)

『カンタベリ物語』総序文の中でチョーサーが初めて使用したラテン語とフランス語の研究　(1)

保谷一三

これはチョーサーが『カンタベリ物語』総序文ではじめて借用したラテン語とフランス語の研究である。借用語の全リストはすでに1979年に『山梨大学教育学部研究報告第30号』に発表してあり、今回は研究の第二段階となる。はじめての借用語数は59語で、*O. E. D.* と筆者の推定に基づく。借用の年代は1386年と確定しており、これとフランス語における初出年とを比較し、借用の早さ、借用の文化的背景を論じる。その際大陸のフランス語と英国のフランス語とを区別し、なじみのフランス語からか海峡の彼方のフランス語からかによって借用の意味のちがいを明らかにする。

キーワード：チョーサー　ラテン語　フランス語　借用語

1．AF achatour [achatour] *n* 1386Ch. *Prol*. 568

A gentil MAUNCIPLE was ther of a temple
Of which *achatours* mighte take example
For to be wise in byynge of vitaille 567-9

（大意）ロンドン法曹院の賄い方[1]は買い方が上手で、王室の賄い方も範とした方がよいほどだ。

チョーサーが王室の賄いに詳しいのは妻フィリッパがエドワード三世妃の女官をつとめていたことから推定できる。また買い方が上手であるという評価も、チョーサーが祖父、父、自分と三代にわたって税関長をつとめ、輸出入品の価値評価に通じていたことからも現実性がある。pure French（"French of Paris"）でachateurがはじめて使われたのは十二世紀[2]で、二世紀の経過があるが、その間にAnglo-Frenchとして英国で使われるフランス語に入り、その方面の文献に出ているようであるが[3]、英語として初めて使ったのはチョーサーであることになっている[4]。このときには既に一般的な「買う人」という意味は「王室の賄い方」という特殊な意味に限定されていた[5]。

2．F amblere [ambler] *n* 1386 Ch. *Prol*. 469

Upon an *amblere* esily she sat 469

（大意）ゆっくり歩く馬に安楽に乗っていた。

この女性はWif of Batheである。ラテン語ではただ「歩く」を意味した動詞がガリアで「側対歩で歩く」という専門的な意味を与えられ[6]、1110年[7]ないし1160年[8]には、それをもととした「側対歩で歩く馬」という名詞の発生をみている。pure Frenchではamblëor, ereという語形は十二世紀から十六世紀にかけて使われた[9]が、今ではambleurという語形が使われている。チョーサーがとり入れたのは226年、ないし276年の年差をもつが、Anglo-Frenchには、amblerという動詞しかない[10]から、名詞はフランス直輸入ということになる。

3．armee [army] *n* 1386 Ch. *Prol*. 60

At many a noble *armee* hadde he be. 60

（大意）多くの聖なるいくさに出陣した。

armeeは過去分詞をもととして作られた名詞で、はじめはarmé「軍人」であり、十二世紀と十三世紀に使われ[11]、次いでarmee「軍隊」が1360年に文献に出る[12]。これは特に「海軍」を意味したので、その後生じた「いくさ」の意味も海外遠征の意味が強くて当然で、Stoneと

山梨医科大学英語
（受　付：昭和59年9月17日）

Rothwell 編の辞典は、armee＝armed expedition とした上で、pur faire a. sur la meer *Stats* II. 24. iii を引用しているが、ここにはっきりと海を渡ってするいくさが述べられている。また *lexis* によれば、このような armee の使い方は現代フランス語でも熟語として生きており、être aux armées（＝en opérations militaires）がそれである。

4．OF ascendent［〃］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 417
Wel koude he fortunen the *ascendent*
Of his images for his pacient 417-18
（大意）上手に患者に好都合な星の上昇を予測することができた。

これは Doctour of Phisik のことである。当時外来の占星学が大流行で、医者もその知識が必要であったことを表わしている。pure French に ascendent が現われたのは 1372 年[13]であるから、初使用は 14 年の差しかなく、その流行の早さを物語っている。チョーサーは 5 年後の 1391 年に占星学論文 *A Treatise on the Astrolabe* を発表しており、その part II の 3．には“any signe that assendeth on the Est Orisonte, which that is cleped communly the Assendent, or elles Oruscupum”［“signum super orizontem qui communiter vocatur ascendens”］という個所があり、ascendent が説明されている。しかし cleped communly とことわっていることから、チョーサーが作った言葉ではなく、既に占星学の用語としてあったことがわかる。とはいえ、この知識言葉はチョーサーにとっても医者にとっても新しいものなので、ここにはわくわくするような感激の雰囲気をよみとるべきである。なおフランスの店頭には astrologie médicale の本が今でも並んでいる[14]。

5．LL baggepipe［bagpipe］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 565
A *baggepipe* wel koude he blowe and sowne. 565
（大意）バッグパイプを上手に吹いて鳴らすことができた。

これは Millere のことである。Stone と Rothwell 編の辞典によると、bagge という語は Anglo-French で使われている。OF bagues, Mod. F bagage であるが、pipe という語は R. D'H の辞典によれば十二世紀から十六世紀までは「管」の意味でフランス語の中で使われたが、その後は chalumeau とか pipeau という単語にとって代られ、pipe は英語の方に借用されたとある。また *Oxford Dictionary of English Etymology* によると、bagge は「袋」の意味が十三世紀からはじまっている。従って合成語 baggepipe は十三世紀以降の産出とみてよいが、楽器自体は非常に古い歴史をもつようなので[15]、どうして初めてチョーサーがこの語を使ったのかはなぞである。

6．OF beggestere［begester］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 242
Bet than a lazar or a *beggestere* 242
（大意）癩者や乞食を知るよりも（お金をくれる相手の方をよく知っていた）。

これは Frere のことである。Stone と Rothwell 編の辞典によると、Anglo-French begger「物乞いする」という動詞があるので、その名詞 beggestere の創出は容易であるが、語尾-stere は英語の語尾であるから、英語名詞として作られたことになる。

7．OF boras［borax］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 630
Boras, ceruce, ne oille of tartre noon 630
（大意）硼砂でも、白鉛でも、酒石でも（治らない）。

これは Somonour のことである。硼砂でも彼の顔の炎症を治せないと言っている。*Oxford Dictionary of English Etymology* によると、アラビア語で būraq、中世ラテン語で borax、Old French で boras。Dauzat et al. の辞典によると、borax の初出は十四世紀。boras は 1530 年でチョーサーに後れる。

8．OF bracer［〃］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 111
Upon his arm he baar a gay *bracer* 111
（大意）腕には派手なガードをつけていた。

これは Yeman のことで、弓をよくする人のようである。仏語では古くから bras をもととした名詞 bracelet を使っている[16]。英語のこの形は、*O. E. D.* によればフランス語の brassard の影響の入った OF brasseüre の英語形である。Stone と Rothwell 編の辞典にはこの語はない。

9．OF breem［bream］ *n* 1386 Ch. *Prol.* 350
And many a *breem* and… 350
（大意）そしてたくさんの食用鯉や…（を飼ってい

た)。

これは Frankeleyn のことである。*lexis* によれば仏語で brême といい、古フランク語*brahsima に由来し、初出は 1100 年とのことである。この魚は淡水魚で、*S. O. D.*によれば carpbream ともいう。食糧危機に備えて魚を家敷内に飼うのは古くからのことであろうが、この魚についてはフランス十二世紀、英国十四世紀がはじめての言及である。

10. burdoun [burdon]　*n*　1386 Ch. *Prol.* 673

This Somonour bar to hym a stif *burdoun* 673

（大意）この召喚吏は大きな低音の喉で（免罪符売りの歌の）伴唱をした。

これは Somonour のことである。*lexis* によればこの語のフランス語初出は 1200 年である。虫の低い鳴き声、祈禱の低い人声などを指す。Stone と Rothwell 編の辞典に収録されているので、チョーサーは Anglo-French から借用した可能性が高い。

11. F　cape [〃]　*n*　1386　Ch. *Prol.* 408

From Gootland to the *Cape* of Fynystere 408

（大意）(スエーデンの）ゴットランド島から（スペインの）フィニステール岬まで（よく知っていた)。

これは Shipman のことである。ここで cape は「頭」の意から「岬」の意に転じているが、その意味での初出は pure French では 1382 年である[17]。Stone と Rothwell 編の辞典によると、Anglo-French に cape が「岬」の意味で出ているので、pure French から直接、あるいは Anglo-French を経て、直ちにチョーサーが使ったことになる[18]。この早さは税関の役人としての職務と関連させて考えることができるかも知れない。

12. F　ceruce [ceruse]　*n*　1386　Ch. *Prol.* 630

Boras, *ceruce*, ne oille of tartre noon 630

（大意）硼砂でも白鉛でも酒石でも（治らない)。

これは Somonour のことで、7．でも扱った。新薬の一つが白鉛ということになる。この ceruce はラテン語の cerussa に由来し、pure French では 1200 年ころ初出している[19]。それから 186 年くらい後にチョーサーが使っているわけで、この長い時間の経過が何を意味するかわからないが、Anglo-French にも出ている[20]ので、そこではもっと早くから使われていた可能性がある。

13. F　chapen [chape]　*v*　1386　Ch. *Prol* 366

Hir knyves were *chaped* noght with bras 366

（大意）彼等の短剣のこじりは真鍮ではなかった。

これは五人の職人のことである。ここでは chapen は「cap や hood をつける」の意で、pure French としては動詞は知られていないが、chapé という形容詞形は十三世紀に初出している[21]。一世紀後にチョーサーが使っている。なお Anglo-French には chape *n.*はあるが chaper *v.*はない[22]。*O. E. D.*は chape *v.*という見出しをかかげているものの、用例は全部過去分詞で、実際は *n.*→ *adj.* 止まりで、*v.*はなかったと、pure French を援用して断言できるかも知れない。

14. GK　Christophere[Christopher]　*n*　1386　Ch. *Prol.* 115

A *Cristophere* on his brest of silver sheene 115

（大意）輝く銀の聖クリストファ像を胸に下げていた。

これは Yeman のことである。この語形がフランス語を経由したという辞典的な証拠はないが、ME で Christophre であった[23]こと、同じく ME Crist が OF の Crist に由来する[24]ことから、フランス語を経由した可能性がつよい。Mod. E は Christopher で、Mod.F は Christophore, Christophe[25]である。

15. OF　cloysterless [cloisterless]　*a*　1386　Ch. *Prol.* 179

Ne that a Monk whan he is *cloysterles* 179

（大意）僧院を失ったときの坊さんは（…ということなんか気にしない)。

これは Monk のことである。cloyster-　はフランス語である。現代フランス語で cloitre。初出は 1190 年である[26]。これは Anglo-French にもあって、cloistre, claustre, clostre という語形がみられる[27]。そして cloistrier, -rer, clostrier は形容詞又は名詞として cloistered (monk or nun) を表わす[28]。一方僧院を失ったときの仏語はわからないが、この cloysterles は英語の形容詞語尾をつけていて英語らしさが現われている。

16. OF　colpon [coupon]　*n*　1386 Ch. *Prol.* 679

But thynne it lay, by *colpons*, …679

（大意）しかし（髪は）ぱらぱらで…。

これは Pardoner のことである。フランス語では

morceau の意味で、初出は 1100 年ころという説[29]、1189 年という説[30]があり一定ではないが、これとチョーサーの 1386 年の間には 286 年から 206 年の距りがあり、ゆっくりと英語に入ったことになる。Stone と Rothwell 編の辞典によると、Anglo-French に colpon, coupon が slice や piece の意味で存在するから、チョーサーは Anglo-French からとり入れた可能性が高い。

17. ML cordial [〃] *n* 1386 Ch. *Prol.* 443
For gold in physik is a *cordial* 443
（大意）なぜなら医学では金は気付け薬だから。
これは Doctour of Phisik のことである。

cordial は心臓薬の意をもつ名詞で、語形的には形容詞から派生した名詞である。*S. O. D.*によると、medicine の意はチョーサー初出である。一方 *O. E. D.*は perh. immed. through F *cordial,* 13th c.と言うが、仏語辞典系はなぜか名詞をとり上げず、*lexis* のみ 1687 初出で liqueur tonique の意を記載している。これはチョーサーより 302 年もあととなる。一方 Stone と Rothwell 編の辞典も形容詞のみをとりあげている。従って十分納得のいく説明は今はない。medicina cordialis を一挙に短縮して英語化したと考えれば一応の説明はつくのだが。

18. OF dettelees [debtless] *a* 1386 Ch. *Prol.* 582
In honour *dettelees,* but if he were wood, 582
（大意）（主君を）名誉をもって、借財せずに（暮させる）。気違いではそうもさせられないが。
これは Maunciple のことである。フランス語で dette の初出年は 1160 年[31]である。

dettelees に当たるフランス語の形容詞はなさそうであるから、英語独自の造語としても、このように仏語の本体に英語語尾をつける方法は仏語をとり入れてからどれほど経ってできるものであろうか。Stone と Rothwell 編の辞典によると、dette は Anglo-French にも出ている。ここで馴染みの期間があったと考えてよいであろうか。現代英語では out of debt がふつうである。現代フランス語では sans dettes[32]である。

19. F digestible *a* 1386 Ch. *Prol.* 437
But of greet norissyng and *digestible* 437
（大意）（医者の食事は）非常に栄養に富み消化もよい。
これは Doctour of Phisik のことである。

digestible がフランス語に現われた初出年は 1314 年[33]、又は 1373 年[34]である。これに対してチョーサーは 1386 年であるから、72 年ないし 13 年の距りとなり、比較的早く英語に入ったことになる。消化への関心の大きさを表わすのかも知れない。

20. dormant [〃] *a* 1386 Ch. *Prol.* 353
His table *dormant* in his halle alway, 353
（大意）彼のつかう固定した食卓がいつも食堂にある。
これは Frankeleyn のことである。フランス語で dormant の建築関係の初出年は 1366 年[35]であるから、ちょうど 20 年後にチョーサーが英語で使ったことになる。分解式の table が *Beowulf* 以来のおなじみだが、このような床固定式のテーブルがフランスに起ってすぐ英国に入るあたり、流行の流れのはやさを感じさせる。しかし現代仏語では table fixe[36]、現代英語では fixed table である。

21. F ecclesiaste [〃] *n* 1386 Ch. *Prol.* 708
He was in chirche a noble *ecclesiaste* 708
（大意）彼は教会の高尚な牧師だった。
これは Pardoner のことである。フランス語としてはこの語はもともと形容詞で、eclesial 又は eclesiastre[37]とも、ecclesial 又は ecclesiaste[38]とも記録され、十二世紀初出である。名詞用法がいつからかはわからない。一方 Anglo-French としては eclesiastike, ecclesiastice が記録されている[39]が、これも形容詞で名詞ではない。従って一応語形的には pure French から直接借用したことになる。現代フランス語では ecclesiastique に変っている[40]が、現代英語は今も昔のままである。

22. F envyned [envined] *a* 1386 Ch. *Prol.* 342
A bettre *envyned* man nowher noon 342
（大意）この人ほどワインをもっている人はほかにはいない。
これは Frankeleyn のことである。フランス語としては enviné は「(器)がワインの香りをつけた」の意とされている[41]。人が主語となり、「ワインをもっている」を意味するような語義は *O. E. D.* や *S. O. D.*など英国系の辞典のみが載せている。一方 Anglo-French でも turned into wine の意しかない[42]。従ってこれは語形的にはフランス語であっても、全く英語だけの用法であるということになる。

23. Du Flaundryssh [Flandrish]　*a*　1386　Ch. *Prol.* 272

Upon his heed a *Flaundryssh* bevere hat 272

（大意）頭にはフランドル製のビーバー帽をかぶっている。

これは Marchant のことである。フランス語の語源辞典にはこの固有形容詞の記載がない。*O. E. D.*のみ Dutch としている。しかし、a を au と書くのは Anglo-French の特徴であり、また-ssh という語尾もフランス語の特徴である。例えば For Frenssh of Parys was to hire unknowne 126[43]の-ssh や Giles Frenssh par cause quil est gardien de la garderobe deinz le chastel de Wyndsore[44]の-ssh と一致する。従って語形はフランス語、特に Anglo-French と考えられる。ただ Stone と Rothwell 編の辞典にはこの語の記載がない。

24. F (foot) mantel　*n*　1386　Ch. *Prol.* 472

A *foot mantel* aboute hir hipes large 472

（大意）足カバーを大きな腰に巻き、

これは Wif of Bathe のことである。この mantel は現代フランス語の manteau の古形である。この語の初出は 980 年[45]であるが、英語では loose sleeveless cloak の意で初出が十三世紀、いろいろなカバーの意で十四世紀となっている[46]。チョーサーの場合はこのカバーの意味での用法の一つを示す。借用語が一世紀を経て、ようやく独自の用法をもつに至った一つの例となる。

25. AF gauden [gaud]　*v*　1386　Ch. *Prol.* 159

A peire of bedes, *gauded* al with grene 159

（大意）ロザリオは大きな緑の玉が入っている。

これは Prioresse のことである。ここで gauded は having the Gaudies or larger beads green の意である[47]。この語のもとは名詞 gaud で、大小二種の玉のうち大玉を指す。名詞 gaud は 1381 年の Anglo-French の文献に出ていると *O. E. D.*は言っている。そして *S. O. D.* は gaud *v* は furnish with gauds の意で、1552 年まで用例があるとしている。pure French の語源辞典には記載がない。なお Oxford Middle-English Dictionary の説明は染科植物の OF gaude を基にしていて、黄色染科なので、?adorn に語義を転じさせてから、チョーサーの用例を扱っている。

26. OF gipser [〃] *n*　1386　Ch. *Prol.* 357

An anlaas, and a *gipser* al of silk 357

（大意）両刃の短剣を下げ、絹の巾着をつるしていた。

これは Frankeleyn のことである。gipser は OF では gibeciere で、もと狩人や釣師の「獲物入れ」を意味し、初出は 1280 年[48]、「巾着」の意味では初出が 1316 年である[49]。一方 Anglo-French では gybe, give が「袋」を意味した[50]らしいが、語形や音形から言ってチョーサーのは pure French の系統である。フランス初出からちょうど 70 年後にチョーサーにおいて英語で初出していることになる。

文　献

1) これは厨司長と執事の下僚である。
2) Dauzat et al.編 *nouveau dictionnaire étymologique,* Larousse 1964 による。
3) Stone と Rothwell 編 *Anglo-Norman Dictionary,* The modern Humanities Research Association 1977-による。
4) *The Oxford English Dictionary*（以下 *O. E. D.*と略す）、*The Compact Edition, Oxford 1971* による。
5) *O. E. D.*による。
6) Dauzat et al.編の同上辞典による。
7) *lexis,* Larousse 1975 による。
8) Greimas 著 *dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIVe siècle,* 1968 による。
9) Grandsaignes d'Hauterive 著 *dictionnaire d' ancien français, moyen âge et Renaissance,* Larousse 1947（以下 G, D'H. と略す）による。
10) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。
11) G. D'H.の同上辞典による。
12) *lexis* による。
13) Dauzat et al.編の同上辞典による。
14) 1984 年夏フランスのポー市において筆者のみたもの。
15) *O. E. D.*によれば、"a musical instrument of great antiquity"である。
16) *lexis*, Greimas, G. D'H による。
17) *lexis* による。
18) 引用した、ともいえる。
19) *lexis* による。

20) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。この辞典は初出年を示さないので利用しにくい。
21) G. D'H.による couvert d'une chape と説明している。
22) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。
23) *The American Heritage Dictionary*, 1969 による。
24) *The Oxford Middle-English Dictionary,* 1978 による。
25) これらの語形は Christophoros という原形にいったん戻ってから変形されたというべきである。
26) Dauzat et al.編の同上辞典による。
27) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。
28) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。
29) *lexis* による。
30) Greimas の辞典による。出典は *Roman d'Alexandre* (1180)。
31) Dauzat et al.の同上辞典及び *lexis* による。
32) M. Louis Cazamian, Professeur à la Sorbonne, の現代仏訳《ソルボンヌ版対訳『カンタベリ物語』の総序文の全訳を担当》による。本対訳書はポー大学文学部図書館所蔵のものを利用した。
33) Dauzat et al.編の同上辞典による。
34) *lexis* による。
35) *lexis* による。
36) M. Louis Cazamian の同上現代仏訳による。
37) Greimas の辞典による。eclesial 1190 年初出。eclesiastre 1160 年初出。
38) G. D'H. の辞典による。両形一緒に扱って、十二世紀から十四世紀まで使用したという。また ecclésiastique の古形としている。
39) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。
40) M. Louis Cazamian の同上現代仏訳による。
41) *lexis* による。
42) Stone と Rothwell 編の同上辞典による
43) The General Prologue の 126 行。
44) *Proceedings and Ordinances of the Privy Council of England* I 1386-1410 Richard II-Henry IV《連合王国マンチェスター大学所蔵》による。
45) Dauzat et al.編の同上辞典、*lexis*、Greimas の同上辞典による。
46) *The Oxford Dictionary of English Etymology*, 1966 による。
47) A. W. Pollard 著 *Chaucer's Canterbury Tales* The Prologue, Macmillan Education 1976 の注による。
48) *lexis* による。
49) *lexis* による。
50) Stone と Rothwell 編の同上辞典による。

Abstract

A Study of Latin and French loan words which Chaucer first used in the general prologue to *The Canterbury Tales*

Katuzo HOYA

This is a study of the Latin and French loan words which Chaucer first used in the General Prologue to *The Canterbury Tales.* The whole list of the Latin and French loan words in the Prologue was published already in *Memoirs of the Faculty of Liberal Arts and Education of Yamanashi University,* NO. 30, in 1979, so this is the second step of the loan word study. The number of the loan words concerned is 59, based on *The Oxford English Dictionary* and the inference of the present writer. The date of the first borrowing is ascertained to be 1386. So the present study compares the date with that of the first recorded appearance in the French language, and elucidates the rapidity, and the cultural background, of borrowing. Special emphasis was placed on distinguishing the two sorts of the

French language, Continental French and Anglo-French (or Anglo-Norman), thus making clear the nuance of borrowing.

Department of Foreign Languages (English)